



Title	大阪大学フランス語フランス文学会研究会 柏木隆雄 教授退職記念シンポジウム：「いかに物語を語り始 めるか-小説の冒頭句incipitをめぐって」要旨
Author(s)	
Citation	Gallia. 2009, 48, p. 81-84
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11293
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学フランス語フランス文学会研究会
 柏木隆雄教授退職記念シンポジウム：

「いかに物語を語り始めるか—小説の冒頭句incipitをめぐる」 要旨

2008年3月8日

於 大阪大学言語文化研究科棟2階大会議室

冒頭句は現実世界と物語世界の間の敷居であり、戸口である。読者は物語のはじまりの言葉を読み出すや、異なる時間、異なる空間に連れ込まれ、別次元の生を生きることになる。いかに物語を語り始めるか、このことに苦心しない作家はおそらくいないだろう。物語の冒頭句は決して「書き始め」ではない。物語全体の構想が定まってはじめて冒頭句が書かれるのだ。したがって、はじまりの文は作品全体を包含しているとともに、作者の文学観をも表している。さらには、読者を物語世界へ巧みに導入することを企図しているが故に、同時代の精神、世界観、嗜好をも反映している。

本シンポジウムでは、18世紀後半からバルザックまで、すなわち近代小説の目覚めから確立までの重要作の冒頭句についての基調講演（柏木隆雄教授）を踏まえつつ、19世紀前半のバルザックから世紀後半のゾラまでの大小説群、新たな文学観のもとに小説を書いた20世紀初頭のアラン＝フルニエおよびプルースト、忘れがたい冒頭句で始まる『異邦人』の作者カミュについて、4人のパネリストに発表していただいた。三人称体から一人称体へ、単純過去形から複合過去形へ、歴史から記憶へ、客観性から主観性へ、個性的な人物像から特性のない人間へ、短い冒頭文だけでも実に豊かな文学の変遷、流れを垣間見せてくれる。

（和田 章男）

基調講演 書き出しの妙味—18世紀小説からバルザックまで—

柏木 隆雄

ホラティウス『詩法』以来「書き出し」は重視されてきた。19世紀の新しいジャンルroman「小説」も同様である。その嚆矢としてのシャトーブリアン『ルネ』（1802）の書き出しは、新大陸の博物誌から始めて18世紀に繋がりながら、メランコリーなる「世紀病」を浮かび上がらせ、ロマネスクな世界に極めて巧みに導入する。スタール夫人『コリンヌ』（1807）も、貴種の青年が異境での冒険、恋愛のヒーローとなる伝統的構造ながら、精神的苦悩という、いかにも知的な世紀病を映して、冒頭、両主人公登場の描写は、案外類似する。

コンスタンの『アドルフ』（1815）も主人公の異郷への旅立ちに始まる。前世紀のグランド・ツアーを思わせる書き出しは18世紀的だが、如何に父を意識して内

向的となったかを語り手が物語って、近代的な新しさを持つことになった。

ほぼ10年後のアドルフの後継者アルマンはあまり注目されず、近代小説史上画期的なスタンダール『赤と黒』では貴種の青年の出番はなく、舞台も遙かな異土に求めず、フランスの小都会ヴェリエールとなる。自然描写は平凡に見えて新しい躍動感を山の佇まい、河の奔流などによって示し、ドゥブ河の上に築かれた要塞の廃墟は、下火になりつつあるロマン主義的な光景を冷ややかな形で提出し、製材所の息子の主人公を町一番のブルジョワ、レナール氏が家庭教師に雇う。冒頭の舞台描写は、19世紀的な物語の構造を初めて示しているのである。

しかし19世紀近代小説本来の仕掛けは、バルザックの登場を待たなければならない。先の4人の作者の冒頭部分と比較するために『ウジェニー・グランデ』の冒頭を詳しく検討する。一見何らロマネスクな意味を持たない風景や町の佇まい、住人の姿形が、実は物語全体を暗示する大きな仕掛けとなっていることを、テキストを追って細かく分析した結果を示すことで、それが明らかになるだろう。

『人間喜劇』の《incipit》研究の概要とその意味について

奥田 恭士

まず、最近の研究として、J.-D.ゴリュ&J.ジュフェレの『ひとつの世界を構築する—「人間喜劇」の冒頭句』とA.D.ルングの『小説の冒頭句』の二著を取り上げた。前者は、言語学的な視点から『人間喜劇』全体をコーパスとして考察し、意図的に執筆時期や生成過程を無視しているが、今まで考えもしなかった問題に気づかせる。後者の視点は、冒頭句をめぐる詩学と生成研究の統合にあり、生成指標やナラトロジーの諸概念を丁寧に扱って示唆的だ。

二つの研究を端緒とし、バルザックの冒頭句をめぐる問題点として、以下の四点を指摘した。

(1) 二著で最も気になるのは、『分析的研究』を考慮していない点だ。『人間喜劇』をひとつの構造体と考える場合、ロマネスクではないという見方から除外することは適切ではない。特に『結婚の生理学』には物語的な断片や『レシ』が数多く含まれており、近年再検討が進んでいる。

(2) 「どこまでを冒頭句とするか」については、一般にジェネティクな問題と絡む。バルザックの場合も、同じテキストがその枠取りを変える例があり、設定には慎重を要する。

(3) 語り手が二重構造をなす、異相が入り込むといったケースがバルザックには少なくない。冒頭句研究には語り手を考慮する視点も必要である。

(4) 現行テキストの初出初版には、サブタイトルや章立て、献辞など、パラテキストとも言える分けや指標があった。作品の冒頭は必ずしも本文の最初とは限らないという点も考慮しなければならない。

構築された叢書のなかで —ゾラの冒頭句が照らす「大家族」の歴史とその思想—

高橋 愛

1880年のスタンダール論で『赤と黒』（1830）の書き出しを批判したゾラは、冒頭文が小説の巧拙を決定づけると考えていた。『ルーゴン・マッカール叢書』（1871-1893）における二十の冒頭句を眺めるならば、作家が緻密に構築した叢書的一端を窺い知ることができる。

第一巻『ルーゴン家の運命』（1871）の冒頭文と終行で、実在と架空の地名、格言的現在と半過去を巧みに織り交ぜるゾラは、一家の起源、叢書全体で循環する「生」と「死」のサイクルを明かす。そして、冒頭句が物語の本筋に通底することを示すべく、第二巻以降の題名と冒頭句内で用いる語彙に特別な注意をはらう。それは各作品が取り上げる人物、問題とする社会領域や環境の情報も明示して、小説の読みやすさを保証するものである。題名の本質を暗示し、描かれる物語世界の広がりや予感させる冒頭文は、しばしば作品の終行と呼応しており、一文のために苦吟したゾラの姿を浮かびあがらせるが、そうした一文が一作品の枠を超えて別の作品の結末へと導かれるとき、作者の思想は脈々と叢書全体へと伝わってゆく。叢書の冒頭句は、『人間喜劇』（1842-1848）に範をとりながら重い書き出しをめぐって思考を重ね、フローベールに倣って描写から教訓的要素や冗長さを取り除き、小説の発展に取り組み続けたゾラの努力を映す。それは19世紀における作家の位置を確実に示しているのである。

1913年の二つの冒頭句

和田 章男

第一次世界大戦の前年1913年には、アラン＝フルニエの『グラン・モーヌ』とブルーストの『失われた時を求めて』の第1巻『スワン家の方へ』が刊行された。戦争によって過去へと埋葬される「ベル・エポック（良き時代）」最後の年である。規模の相違はあるものの、両者ともに少年時代、青春時代がテーマとなっている。前者の冒頭句（「彼は189...年11月のある日曜日に私たちの家にやってきた」）は三人称体、単純過去形という一見伝統的な形体をとっているように見えながら、人物像、場所、時間がいずれも定めがたく、伝統的形式を内部から破壊している。実際のところ、新世紀に生きる語り手の「私」が過ぎ去ろうとする時代を背景として青春の冒険物語を復活させるのだ。ブルーストの長大な小説は、「長い間、私は早く寝た」という単純な文章で始まる。時間も場所も曖昧でありながら、夜から始まる物語は前例がない。複合過去形を用いて、語り手が闇の中から記憶によ

りながら壮大な物語を語り始めるのだ。世紀転換期を生きた両作家はともに時代の変化に文学的表現を付与するとともに、人間の変貌を重ね合わせることによって、歴史的時間と個人的時間を融合させる。19世紀の客観性に基づくリアリズムに決別を告げ、視点となる「私」の存在により「探求」が主題化されるとともに、世界と向き合う人間の主体性の復権をめざしたとも言えよう。

カミュ『異邦人』の冒頭句を中心に

安藤 麻貴

カミュの小説『異邦人』の冒頭句には、この作品独自の魅力と新しさが凝縮されている。「今日、ママが死んだ」という冒頭の一文は、「今日」という、客観的に特定することができない時の指標とともに、読者を即座に語り手の世界に引き込む。この唐突な書き出しは、例えばサルトルの『嘔吐』との比較によって際立つ。サルトルはこの小説で、古典的な枠小説の形式を用いることにより、物語の時や主人公の名前等の情報を読者に提示した上で日記体の本文を開始しているのである。しかし、『異邦人』の冒頭句の最大の特色は、口語で用いられる複合過去形の使用と、内面を明らかにしない一人称の語りというこの小説の斬新な技法が鮮やかに示されている点であろう。語り手は母親の死に対して動揺を見せず、その淡々とした語りは、冒頭部に挟まれる電報の無機質な文体と呼応する。語り手が電報を前に漏らす言葉「これは何も意味していない (Cela ne veut rien dire.)」は、のちに彼の無関心を示す表現として反復されていく。また、母親の死から息子の死へ、という冒頭と末尾の照応も注目すべきである。カミュは、『幸福な死』の失敗を経て、緊密な構成をもつ物語世界を構築するに至った。『幸福な死』が、三人称で半過去形という伝統的な小説の書き出しであることに鑑みると、独自の文体を確立する『異邦人』の冒頭句は、小説の冒頭句がいかに作家の創造行為の鍵を握っているかを示唆している。

(掲載は研究会当日の発表順)